

幕末維新を駆け抜けたウィリアム・ウィリス ～鹿児島県の医療・保健公衆衛生に貢献～

英国流の医学教育や病院の整備を推進

**鳥羽・伏見の戦いで重傷を負った西郷従道
(隆盛の弟)を快癒させたことがきっかけ。**

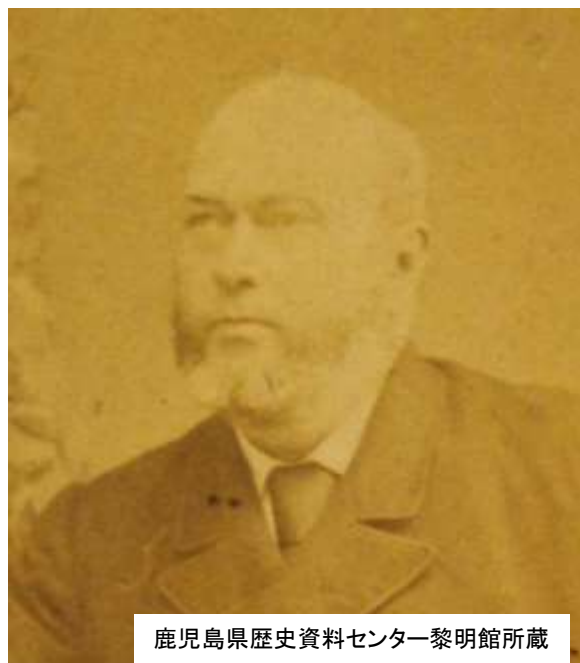
明治3年(1870年)鹿児島に招かれる。鹿児島県は、西郷隆盛のバックアップを得て、医学校、病院の体制、医学の基礎から臨床教育まで広範囲にわたってウィリス医師に任せた。彼も東京でできなかった病院の整備や医学教育を実現したいという情熱をもって組織作りに取り組み、鹿児島医学校を創設。彼の在任中に一学年の入学者数60名、教員を含む総勢250名に達する本格的な医科大学に拡充された。ウィリス医師は臨床現場での実習指導に加えて、自ら植物学、ラテン語、病理学、薬物学などの講義を精力的に行う。

ここで、高木兼寛を見いだす。

西洋医学と地域医療を普及

日本で最も傲慢だった鹿児島の支配階級を説得し、先進的で重要な改革を実行、多くの県民から感謝された。

彼が設立した病院で外来・往診を併せて数万人もの患者を診ている。また、当時鹿児島では家畜を殺す際に、下水だめに追い込んで溺死させるという方法をとっていた。これが伝染病などの原因になるので、廃止すべきであると彼は主張して、県の役人と激しいやりとりをしている。一方で、彼は牛や羊を放牧して牛乳やバターを生産する酪農を奨励し、具体的にその技術的方法をも指導した。この結果、牛肉や牛乳の価格が下がり、一般の民衆でも容易に手に入れることができるようになった。



鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

ウィリアム・ウィリス

〈略歴〉

出身：北アイルランド
エディンバラ大学医学部
(スコットランド)

役職：1862年(文久2年)来日
駐日英国公使館 外交官・医官

業績：生麦事件の検死を行う。
横浜などで予防医学の先駆的役割を果たす。
幕末維新の各戦争で治療に尽力。
東京医学校(東大医学部の前身)を創設
西郷隆盛の庇護の元来鹿。
鹿児島医学校(鹿大医学部の前身)を創設。多くの医療関係の先駆者を輩出

家族：薩摩藩郷士の娘「八重」と結婚
子も授かるが、永住できず帰国

出典・参考

MonthlyIHEP(岡部陽二・医療経済研究機構)
薩摩藩における英学と西洋医学の普及
(田村省三・尚古集成館)